

紺屋高尾

Powered by War Machine

平成一八年一月八日

上も下も右も左も粋がもてて、野暮が嫌われた時代の話でございます。

江戸の全盛の吉原ではきらびやかな衣装を身にまとった遊女が闊歩し

夜遅くまで煌々とロウソクが照らし、それが消えること無かったといわれております。

そこには全盛期遊女が三千人御免の場所にもいたといいますが

その中でも頂点を占めるのは俗に「傾城」とか「傾国」とかいわれたそうでございます。
この辺になつてきますと氣位も高くて

しかも見識も豊かで

お金も湯水のごとくという三拍子そろつたまるでトップアイドルのよう

よくよく庶民には羨望とねたみの対象となつたものでございます。

例えば「傾城の恋は誠の恋ならで金持つてこいが真のこいなり」

なんて言われたわけですが、それを言われた女郎側も黙っていませんでね

「傾城に誠無しとは誰がゆつた。誠あるほど通いもせず、ふられて帰る野暮なお客の憎手口」とい
う返すわけです。

そんなことを言われつつも、ついつい通つてしまふ男心があるもんですから
妙なものでございます。

「おい、久蔵はどうした？」

「親方、あいつは患つておりやす」

「なに、患つてる？」

「なんでもメシを食わねえみたいです」

「なに？　メシを食わないたあ穩やかじゃないな」

「どれ見舞ってやるか」

コンコンコン

「やい、久蔵！ どうした？ え？」

「あ……親方あ見舞っていただいてありがとうございますが、あたしの病気はもう助からねんです……」

「なんだ、情けない声出しやがって、

誰か言つたぞ病で人は死なねんだ、寿命でしぬって。

てめえのツラ見たつて寿命が着てるたあ思わねえ、しっかりしろあ病気がわかつたらそれに越したことないだろ

先生呼んでやるからこうこうこうつてやつてもらつてちやつちやと元気になれ。どこが悪いんだ？」

「へえ……それが医者も薬も治せんねえです……」

「ほお、ずいぶんな病だな、なんてんだ？」

「それがあ……お医者様でも草津の湯でもつてんです……」

「ほお、なげえ病気だな。」

お医者様でも草津の湯でも……どつかで聞いたことあるなあ、

お医者様でも草津の湯でも恋の……

あ。

おい、久蔵。てめえ何か？ おめえそんなつらして恋煩いか！？

へえ驚いたなあ。おい「冗談じゃねえぞおめえ。」

おめえはな堅えし仕事はしっかりしてるし、仕事終わるつてえと小難しい本読んでそれを楽しんでるようだから堅えヤツはこんなもんかと思つてたが、

いっぱしに女が好きたあけっこうけっこうと思つてみたが、恋煩いってのはやめて貰いてえよ。紺屋の職人だろ、おめえは。

恋煩いってな、お嬢様が思う男がいて

それと添えない、会えないってのをそれを口に出していえないから
積もり積もって寝込むのを恋煩いってんだ

てめえなんて職人で若えんだ

ごちゃごちゃいつてねえでしょつびいてこい！

どこの誰でもいいが人の女房だけはやめとけよ罪になるから
後は誰だつていいんだ、どこの女なんだ、相手は？」

「それが…：相手、相手と聞かれましてもねえ…：。」

実はとんでもねえのにほれちまつたんです…：。」

「なんだよ、とんでもねえのつてな。」

あ、待てよあ？

こないだからどうも様子がおかしいと思つたらこの馬鹿

おい！ おたふく

ちよつと二階が上がつて来い！

え、ああ笑つてる場合じゃねえ、てめえに恋煩いだつてよ、しょうもねえ野郎だなあまつたく。
泣かなくつてたつていい、惚れちまつたもんはしょうがねえ。

俺さえ我慢すりゃうちうちで済むが

こんなんでも女房だからなあ

まるつきりお前にくれちまつつてわけにもいかねえから

一月交代つてことにしとくかあ？」

「いやあ…親方そんなんじゃないんです…」

わたしあおかみさんなんざ思ったわけでもなんでもねえんです…
とんでもねえ大名道具に惚れちまつたんです…」

「変なもんに惚れやがったなあ？」

人間じゃねえ、道具に惚れやがったこいつあ。

お前、下行つていいよ。

ああ。そうかあ大名道具？

妙なもんに惚れやがった、なんだ、弓とかなぎなたとかか？
そうじゃねえ？

鉄砲、大砲かあ？」

「…そんなんじゃねえんです」

「おい？ いい加減にしるよあ？」

俺が馬鹿になつてお前に聞いてんだろうよ？

てめえだつて口がきけねえわけじゃねんだから

なんとかかいつたらどうなんだ？ おい、はつきりしろい！」

「親方あ、心配するといけませんからあ…言いますう…」

笑わないでくださいねえ…？」

「てめえの気にしてること笑つ親方じゃねえ、言つてみる！」

「三日前、兄弟子たちに連れられて

みんなで吉原の夜桜見物に生まれて初めて

わたしあ吉原の中に入ったんです……」

「おう」

「すと、ワーワー人が騒ぐ、ぞろぞろと人が動いていたんで

付いて行ったら花魁道中にでくわしたんす……」

「おう、いいもんに出くわした、花魁道中、きれいだろあ？」

「きれいもなんにも、周りにいるのが「かむろ」とか「お新造」とか大勢いるんで
いるんなのが来た中で、一際目立ついいいい女があ……！」

「大きな声出しやがる、ちきしょう病人のくせに。大丈夫か、おめえ？」

「へえ、なんだつて聞いたら

「傾城」「傾国」とかいつて金で買える自由になる女だつて

こう言いますんであつしも一度でもいい

ああいう女と一晚床を共にしてみてえ

一時でもいいから話をしてみてといたしましたら

兄弟子に

馬鹿野郎、なにを夢みてえなこといつてやがるんだ

あれは十万石の大名の格式をもつ三浦屋の高尾花魁だ。

ありやあな、『大名道具』っていつてな、お大名やお大尽じゃなきやあ相手にやしやしねえ。

紺屋の職人が及ばぬ恋の滝登り

馬鹿なこといつてねえでメシ食つて寝ちまい……

そうだと思つて帰つてきたんですけども

おもつ駄目段ですよ……

それからつてもものゝ寝ても醒めても……

寝りやあ顔が出てくるう、飯を食おつにも高尾のこと思つと喉と通らなくなつちやう……
何見ても高尾に見えてくるう……

こつやつてみると親方も高尾に見えてきたあ……」

「うわ、気持ちわりっ！」

……ようし、ようし、わかつた！

ベソベソ泣くんじゃねえ。

つまらねえこと言つてやがる、え？

てめえの大名道具つてなそれかあ？

馬鹿野郎！

おらあ大名道具つていうからどつかの大名のお姫様が奥方に惚れたのかと思つただらうが。

たかがおいらんだらうが

おいらんつてな女郎だろ、んなもの？

気位が高いか低いか高尾だかひく尾だか知んねえが

銭持つてきや済むもんだ、かつてこい、かつてこい、ちきしょう。

一生懸命銭貯めて

てめえの金で行きや誰も文句はいわねえ。

高尾だかしらねえがさつさと

かつて病氣治しちまえ！」

「すと、あたしみたいなものでもお金を溜めていくと……

あ、相手にしてくれませんか……？」

「おう、立派な客にしてくれらあな！」

「！　　そうですか！　どれくらいあると高尾がかえるんです？」

「さすがに三百女郎ってはいかねえよ、相手はなんせ

それだけの格式があるから。

そうさなあ、行つてワツと騒いで一晩十五両つて銭はかかるなあ」

「じゅ、十五両ですか！？　いっぺんに払うんすか！？」

「あたりまえだあ、リボ払いで払うヤツがねえだろうよ」

「あつしは何年稼いだら十五両つて銭が貯まります？」

「おめえはな若いけど腕がいい。

そうよなあ、三年、無理なら四年、五年とかかるめえよ？」

「ご、五年！？」

・・・へえありがとござんす、

それじゃあたしは一生懸命

働いて十五両貯めておいらんを買うことに決めました！」

さあ仕事帰ると働くの何の

「15両溜まれば高尾が買える！」

三年たてば高尾が買える！

高尾が三年、15両で三年、高尾が！」

「うるせえな！　静かにしろい！」

そのうちに

去るものは日々に疎しとやら

高尾と言わなくなったし15両とも言わなくなった。

いい塩梅だ、忘れりゃけっこつだと思っっているうちに三年たっちまった。

「親方、おはようございます」

「おう、おはよう」

どうしたい？ こぎつぱりして見違えるようになった
なんだおめかしか？」

「へえ、朝湯にいつてまいりました」

「おう、そうか」

おめかししてお出かけか？」

「へえ、今日一日お暇頂いて、遊んでこようと思ひまして」

「おう、行ってこい行って来い。」

働いたら遊んでこなきゃおさまらない、そういうもんだ、人間てな。

小遣いが無かつたらおくから出してもらつてあそんできな」

「へ、ありがとうございます」

あのおう、親方

ちよくちよく給金を預けておきましたあのお金

あれ、どのくらいになりましたか？」

「おう、ゆんべ丁度そろばんパチパチ弾いてみたんだが

久蔵、豪儀なもんだな

貯まったぞ、三年で十八両と二分！

たいしたもんだなあ

銭つてな使うのはわけねえこつた

あと一両八分溜める

そしたら二十両つて金になる。

貯まったら着物の上下こしらえて土産もん、持たしてやる

そしたら国のおぶくろさんにその二十両出してこれこれですと話をしる。

他人に貰う千両万両よりも

我が子の貰う二十両がどれだけうれしいかわからねえ、そういつもんだ。親孝行しとけよ。

そしたらこの汚ねえ店だがお前に譲ってやるつもりだ。

俺はおめえが好きだから

隠居しておめえにあと取ってもらって嫁でも貰ってやるからそんなつもりでひとつ

あと一両と八分だ辛抱しろい！」

「ありがとうございやす、

あのう、そうなんすけど…

そのうち十五両ばかり渡していただきてえんですすけど…」

「へえ！？　なんだ十五両渡してくれって？

使うのか！？」

「へえ、使うんす」

「使つう!? おめえ金持ちの十五両じゃねえ

十八両二分の内の十五両だぞ!？」

え、何使つうんだい?」

「何使つたつてあたしが貯めた金、何使つたつていいじゃないすか…」

「んだ、このやろう? ヤナ言い方しやがる

なんだその言い草は

いけねえいけねえ! 俺はおめえの親方だ

てめえが何使つかわからねえ金をてめえに渡せるか馬鹿野郎!」

「すと、自分で稼いだ金、あたしの金ですけど駄目なんすか?」

「おつ!」

「じゃあ……いりませんよ……」

「いらねえ? じゃあ俺もらつとくわ

おい! おつかあ 銭貰つたよ!」

「……一生懸命自分で溜めた金使えねえくらいなら

あつしは死んじま……」

「うるせえな、妙なこと言いやがる。

あゝちぎしよう!

なにもてめえの金使つちやおつてわけじゃねんだ

ただ、やりやしねえだろつがよ

博打に使つんじやないかと心配してるんだ。

何に使つんだ、言ってみろい

てめえの金だ使わせねえとも限らねんだ
なんか買うのか？ 何買うんだ、言え！」

「・・・わかつてるんでしょあ？・・・」

「知らねえからてめえに聞いてるんだ」

「たかおを買うんです」

「鷹を買う？、変なもん買うんだな

鷹匠にでもなるつもりかえ？

あぶねえからウグイスとかジユウシマツとかにしとけ！」

「親方あ！ あつしやあ夜間も寝ねえで

稼いだってな三年かかって貯めた十五両

三浦屋の高尾が買いてえんですよあ！」

「！」

そうか！ わかった、馬鹿野郎！

早くそれ言え、忘れてたな。

執念ぶけえ野郎だな、てめえはあ

そうかじゃあ一晩のために貯めた十五両使っちゃおうってのか？」

「い、いけませんか？」

「好きだ、そういうこと、うん」

「親方、一緒に行きますか？」

「馬鹿野郎！ 誰が一緒に行けるか！

俺がいけねえのなんのといったらまた

お医者様でも草津に湯でも

なんてどどいつ みてえなこといいはじめるやがるから

危なつかしくてしゃあない。

え、よく聞け、久蔵。

行つて金が無駄になつちやしゃあない。

一見の客をあげるわきやねえし

紺屋の職人じゃ相手にすめえ。

いや、まあまあ待ちな、待ちな！

だからって俺がおめえの女郎芸を指南するわけにもいかねえし

うちの若えのにも気の利いたやつあー匹もいやしねえ

誰か……！ 富公！ ちよつとな横丁の先生のとこ行つて来い

蓄庵先生とこな

ちよいと用があるつてな

あの人あ医者腕はたいしたこたないが

女郎買いは名人でな。

え、丁度そこ歩いてる？

おう、呼び込め呼び込め！」

「あのお、すませんうちの親方がちよつと用があるみたいでお手数はお掛けしませんで」

「さようですか、伺いましょう」

「おう、先生あがつてくれ」

「近くに住んでおきながらなんのかんのと無沙汰をしてすいませんで本日はお日柄も良く」

「堅つくるしい挨拶は抜きして、こつちさすわってくださいや
ほかじゃねんですがね

うちの若い職人のこいつ、久蔵ってんですがね
かてえとおもつたら

かようしかじかでしてね

高尾花魁のあいてえ一心で三年かかって貯めた執念みてえな金が

ここにこう、15両あるんでございますがね

多くはございませんが一つ、先生の取り持ちで、こいつの思いを叶えてやっていただきてえと。
そうしねえとね、患つちやうんでね

病を治すのは医者の仕事だし

女郎芸で治す先生は他にいやしないんでね」

「妙な言い方ですなあ

まあまあ、あたしも大きな声ではいえませんが

あたしは医者腕はたいしたことはないが

女郎芸は自慢じゃないが達者で。

遊びに関しては引き受けますんでよろしゅうござんすが、いつ行きますか？」

「思い立ったのが今日なんで今日がいいんじゃないかと思つて」

「さよつですか、そうじゃ行きましょつ」

「あ、いいんすかねえ。

あの病人とか患者は？」

「いやいやそんなものあ別にかまいませんからね」

「・・・じゃあお願いして」

「お願いはいいですがねえ、そのなりで行かれても困る頭も困る。」

まさか紺屋の久さんじゃいけませんでね

そうですなあ流山のお大尽の若旦那というふれこみので行きましようかね」

「おう久蔵、聞いたか流山の若旦那だよ」

「なんです親方」

「え、金持ちになるよおめえが」

「あ、そうすか 十五両も持つてるもんなあ」

「馬鹿！ なけなしの十五両だろうが、

気前良く振りまくんじゃねえぞ

で、先生どんな具合に？」

「頭をね、若旦那風に直して貰いましょう

おかみさんに手伝つてもらえますかな？」

それから着物を親方のじゃ、ちよつと地味なんで

絹物の上下なんかをちよつと拝借してみましよう」

それからみんなして大騒ぎで

「久公こつち来い！」

「久さんこつち！」

つてな具合にあつち引つ張り、こつち引つ張りしてるといじくりまわしてゐるうちに

大門をくぐる

嘘と真に仲ノ町

ずらりとならんだ堤燈が目に入るや

親の勘当を待つばかり、花魁に可愛がられて運のつき

闇世の中に吉原ばかりが月夜でございまして

そのころ揚屋の数だけで百を越えたんでしようね

学校に7不思議があるように

吉原の7不思議ってモンもありましてね

大門があれど玄関が無く

河岸といつても船付かず

茶屋といつても茶を売らず

すみ町（角町）といつても隅でなく

わかいし（若い者）といつてもハゲがおり

しんぞう（新造）といつてもババアがいて

やり手（遣手）といつてもとるばかり

つてろくなこと言やしませんでね。

お茶屋に案内されまして

「いらっしやいまし、流山の若旦那でございますね？

お待ちしております

さぁお二階へどうぞ」

2階に上がって座敷が決まりますと

大納言が繰り込んできて

芸者や太鼓が集まってきたでドンちゃん騒ぎです。

騒ぎの途中にお目当ては誰かと聞かれるってえと

江戸町二丁目、三浦屋の高尾だつてことになりまして

さあ驚きました。

高尾を買うのは大変だね

その気になつたら十日前から予約して

履歴書に身分証明書、保証人の判子に給料明細もそろえてもつてかな駄目だと

茶屋のおかみさんも駄目だろうと思つたわけですが

そこは客のいつてることだから逆らうわけにもいきませんからというんで

話をしてみると

久蔵さん、運が良かった

ちよつど相手がいないというわけでございます。

こつこつもあるんでしょねえ。

花魁だつて商売ですから相手が居なけりや気位が高かるつが、しょうがないわけで

「大名はんの相手ばかりでは気がつまりんす、

たまにはそのようなさばけたお客はんの相手がしとつござんす」

とこつ思わぬ返事が返ってきたわけでございます。

早速、ドンちゃん騒ぎを切り上げて、はこ提灯でおくられるつてえと三浦屋へ

三浦屋の方では御大尽がお越しということ、主が敷き台に手をついてお迎えをするという、上首尾で

いざいざ。

ここまでくるてえと、先生の方は用はありませんから、中ノ町の方へ帰って休んでおりまして、久蔵だけ花魁（おいらん）の部屋へ通されました。当時、飛ぶ鳥を落とすような勢いの花魁の部屋ですから、そりやもうきらびやかなこと。

中の間の積み夜具は錦の小山のごとく、

一面のことは遙かに滝を眺むるに似たり。

囲いの上がまは松風の音かと驚き、

衣更の小袖は楓の紅葉したるがごとし。

そんなのを見ちゃったわけですから久蔵は

借りてきた猫どころか

炎天下のミミズみたいにコチコチになってしまいました。

そうして待つてゐるとえと衣擦れの音がして

かむろに手を取られて花魁が入って参りました。

流し町の向こうにピタツと座ってタバコを一服つけるってえと

鮮やかな紅をさした唇が静かに開いて

「ぬし、一服つけなまし」

とこつ、きました。

夢にまで見た、患ったほどの花魁が

目の前で凜として眉宇涼しげにしたから

震える胸を

こう、グツと押さえながら

おどろおどろながらもこれをつけまして

「はい、はい」ってんで、向こうに返した。

「ぬし、よう来てくんまました」

「はい、はい」

なにいつても先生に言われたとおり

「はい、はい」しかいわねえから

花魁も話の取っ掛かりがないから

「ぬし、ぎよしなりませ」と

こうきました。

こう言われたはいいが、なんだかわけがわからない。

なんせ紺屋の職人ですからねえ。

いつもみたいに「久蔵ツ、寝ちまえッ！」ってな具合に言ってもらえりゃよくわかるんですがね。

どうしていいか久蔵、おろおろしてるってえと

それとなく察したお付きの新造が小声で

「ぬし、寝なまし」とこう言いますんで

布団に座って待っていると

花魁がかむろに手を控えて入ってくる。

枕元に座る。

花魁坐りと言って、お客にはすっかいいになって、横顔を見せて座るんでございます。

その横顔は部屋のこもれ灯りをわずかに受けて花魁が

どこかはかなげでした。

思い焦がれたその思いが

三年目にはじめて思う通りになりました

夜が明けるなど祈った。

時よ、止まってくれと祈ったのでございますが

無常にも時は過ぎて夜が明けたのでございました。

寝顔見せないのがもぢるん花魁の

そのころの女のたしなみというやつでございますから

薄化粧をして流し町の所にピタツと座ってすいつけたタバコ

二服目を

こつ、吸って

起きていいか寝ていいかわかんねえ久蔵、どうしようかと考えてると

そののにじり寄って来て

「ぬし、一服つけなんし」

とこうきました。

起きてタバコを吸った。

そばによつた高尾が

「わちぎのよつなものを

名指してくれてうれしゅうござんす

おうらにはいつ来てくんますか……？」

こんどきに

「ええ、また明後日にでも」とか

「近いうちに」ってなように言えばそれなりに洒落てるんでございますが、そんなことはとてもとも言える人じゃございません。

それはみなさんもご存知でございますよ。

そんなこと言われたって言いようがないから

「……三年たつたらきつと来ます」

「お客さんは明日来るの、明後日来るのと

言いなんです

ぬしに限つて3年とは……えらく長いじゃありませんか？

もつと早うきてくんまし」

「ええ、おらあ来てえんす

明日も来て、明後日も来てえんす

できらあずつとここにいてえが

花魁……三年……たたなきやこらんねんです」

そういうと久蔵はうつむきながら震えていました。

「ぬしは三年たたねば会えぬ……？」

なんざます……？」

「……花魁！」

何かに打たれたように顔を上げて

こう、じつと花魁を見つめると

久蔵は張り裂けそうな思いを続けたのでございます。

「あつしあもう隠せませんでホントのこと言います！
驚かないで聞いてくださいえ！」

あつしあ流山のせがれでもお大尽でもなんでもねえんです！
紺屋の職人なんす！　ちよ！？

驚かないでください、

実ああつしは三年前、花魁を見てからあ

寝ては夢、起きてはうつつ幻になつてどうにも仕事が出来な
話をしたつて及ばぬコイの滝登りだつて言われて

あつしやあ

花魁を胸にたたんで死んじまおうかと思つた。

患つたんす！

親方が金貯める

十五両貯めたら会わしてやるつてんで

三年の間に・・・寝る間も寝ねえで貯めた十五両・・・

会えました、これでもう

何にもいうことはござんせんて・・・

ええ、わたしあまた働きます・・・！

いっしょうけんめい金貯めてまた来ます・・・！

花魁、あつてやつてください・・・！

しかし、花魁も全盛の花魁だ

長くはいねんでございましょうね・・・

どこかに身請けされてご新造になるか妾にあるかわかりませんが
そうなったら・・・会えません。

どっかの町のどっかの往来でばったり逢ったときに

花魁どうか横むかねえで一つ

久さん、元気って言ってくれ・・・!

それだけであっしあ・・・本望でございます

花魁・・・!

ありがとう・・・ございました。」

長ギセルを逆にとつて吸い口を

こつ、額に当てて考える。

高尾が涙を一つ

ポロつとこぼした。

キセルをそれへパラツと落とすと、小さな音で鳴りました。

「・・・それは本当ですか・・・?」

「こんなあ恥、誰が嘘付くもんですか・・・!」

涙に濡れた久蔵の顔は流山のなんとやらが流れ落ち

すっかり職人のそれでした。

「・・・ならば久はんとやら

わちきは来年三月十五日、年があくほどに

ぬしのそばに眉毛落として行きんすによって

わちきのようなものでも

女房にしてくんなますか……？」

「……え!？」

花魁!？ あつしのによ!？」

……ありがとうございます……!

本気にしてよがんですか!？」

「ぬしの正直に惚れんした……」

わちきのようなものが出来たからは

二度とこの里に足を踏み入れてはいきません……わかりんしたね……？」

そういつて立ち上がるってえと

たんすを引き出しから三十両つて金を出してきて

久蔵の前の出して

「ぬしに預けておきなんす

所帯を持ったときに

たんすでも買つてくんなまし……

わかりんしたね……？」

「へ!？ ……ありがとうございます……!」

押し頂いて大事に持つと

花魁の送られて

まるで魂が宙に浮くように飛んで帰ったのでございます。

「親方! 親方! おはようございます!」

「なんだ!？ うるせえな! どした?」

「ふられたる？」

「あああ、いい天気です！」

「まだこんなこといってやがる、どうだ？」

「花魁来なかつたる？」

「来たか？」

「ええ、花魁来ましてね、親方によろしくって言っていました」

「嘘付きやがれ、馬鹿野郎！」

「え、ばれなかつたか？」

「ばれました！」

「馬鹿野郎、チキシヨウ！」

「だからばれないようにしろって！」

「あ、先生はどうした？」

「あ、先生忘れて来ちゃった！」

「このやろう！ 世話になつた先生置いてくるやつがあるか！」

「え、どうしたんだ？」

「ええと、花魁が来ましてね」

「わ、わちきはぬしにほれんした」

「来年三月十五日、年賀明けたらいきんすによつて」

「わちきのようなものでも女房にしてくんなますかと申しんした。」

「親方どうしたらいいんでありんしょ……？」

「はったおすぞ！ 馬鹿野郎！」

んなこといわれて喜んでやがる
馬鹿、いいか？

花魁の手練手管つてなそんなもんだ
そんなんはみんないうんだよ

嘘に決まってる！」

「三十両つて金貰つてきましたかね……？」

「なにい？ てめえがか？」

あれ？ほんとだ、コンチクシヨウ

間違えだぞ、きつと

取りに来るに決まってるから使うんじゃねえぞ

俺預かつといてやるから働け働け！」

さあ久蔵、

「来年三月十五日高尾が来る！ 来年三月十五日高尾が来る！ 来年三月十五日高尾が来る！」

つて大騒ぎで

周りのやつは

久蔵とも久さんともよばねえで

「おい！ 来年三月十五日、さつさとメシ食っちまえ！」

「あ、はい頂かせ貰います」

なんて調子でね。

卯月、如月とまたたくまに過ぎ去つて

弥生の十五日が来ました。

表ががやがやしてるってえと

垂れをめぐりますと、スツと降り立ったのは高尾花魁の元服姿。

髪を丸髷に結び直しまして、

赤い手柄も恥ずかしい、地味ないでたちですが、

さすが一世を風靡した花魁、

美人画から抜け出したような立ち姿でございます。

「丁稚どん

ご当家に久蔵はんというお人がおりんすによつて
わちきが来たと伝えてくんまし」

「親方！ 大変でございます！」

「！ 火事か！？」

「火事じゃございません！ 高尾が来ました！」

「！

そうか！

久蔵三月十五日だぞ！！」

「わああああああああああああああああ！！」

久蔵叫んだね、うちん中駆けつけて

土間へ来て、高尾と目が合ったら

力がへなへなと抜けて土間へばったり。

「花魁・・・よく来てくれやした・・・！」

早くも涙目でございます。

「久はん……」

三月十五日さます……」

高尾太夫のその顔は満面の微笑みでございました。

「ありがとうございます……！」

見ていた親方の目に涙が点りました。

周りの職人もそれをみて思わず涙が出てきたそうです。

親方が間に入って祝言がすみまして

で、これが跡をとって

江戸っ子の評判だ。

「おい！ 粋なもんだで！」

あの全盛の高尾花魁が職人、紺屋の職人のところにいったって話だ！」

門前市をなして繁盛したそうだ

そりやそうでしょう、全盛を極めた三浦屋の高尾花魁が

一介の職人のところへまごころに惚れて嫁に来たってんですから。

はたしてこの夫婦、

未まで仲睦まじく暮らしたと人の噂でうかがいました。

正直者のまごころに並ぶものなしという

「紺屋高尾」でございます。